

## 会 議 録

1 会議名 第3回不登校児童生徒のための教育機会確保に係る検討会議

2 開催日時 令和6年2月16日（金）15：00～16：40

3 開催場所 小倉北区役所庁舎東棟811会議室

4 出席者（敬称略）

（1）構成員

小嶋 秀幹、シャルマ 直美、長阿彌 幹生、畠山 めぐみ、  
三浦 咲弥、本田 禎之、村上 博志、下田 ゆみ、上田 あけみ

（2）事務局

田島教育長、高橋教育次長、高松学校教育部長、  
中溝不登校対策担当部長、浜崎指導企画課長、有田生徒指導課長、  
福岡不登校等支援センター担当課長

（3）ゲストスピーカー

NPO 法人夢つむぎ 高田遥佳 副理事長

5 議題

（1）不登校対策に係る最近の話題

（2）今通えている居場所の居心地向上策

（3）新たな選択肢を増やす取り組み

6 議事要旨

○議題（1）不登校対策に係る最近の話題

【事務局】

資料3 「第3回 不登校児童生徒のための教育機会確保に係る検討会議」  
議事（1）～（3）説明資料 に基づき説明

【事務局】

福岡県の県立高校で「学びの多様化学校」の取り組みが始まることについて、  
ひびき高校の本田校長先生からお話いただけることあればお願いしたい。

【本田構成員】

おそらく、学級を作るという話で、今ある県立高校のどこかに作るということ

である。この取組のほかに、ひびき高校をスクーリングの拠点として、通信制が始まることも公表された。9月、おそらく後期から、やっていくことになる。青松高校在籍の生徒のスクーリングをひびき高校、あるいは大牟田北、そして西田川、そこが拠点となってやることになると思う。

#### 【事務局】

宮城県の学びの多様化学校に視察に行かれた4名の構成員の皆様より感想をお願いしたい。

#### 【A構成員】

非常に勉強になった。改めて「教育は人なり」ということを感じた。そしてまた、チームで働いているところが素晴らしいと思った。共通して言えることで、3点ほどある。

まず、1点目は、自然豊かな環境でこころ静かに学んでいるというところ、非常に大切なことだと思う。生徒のペースを尊重していた。例えばクールダウンをする部屋でクールダウンをしている生徒もいた。ひびき高校も通級の生徒がいる。通級担当者が授業に入って、「これはちょっとクールダウンさせないと」というときには、廊下に出してクールダウンをしている。そういった環境がまず1番である。

2点目は、少人数であるがゆえに可能な、個別最適な学びができている。ひびき高校でも、わかる楽しい授業を目標に、先生方をお願いして、本人自身が楽しいと思える授業をしてくださいということ、機会あるごとに話をしている。授業の様子を見せていただいたが、複数の目で看取ろうとする活動が非常に印象的だった。具体的な方策として、これは、多分白石市の教育長がおっしゃっていたと思うが、「わからないことについて、わからないといえる授業づくりができている」という表現をされていた。

3点目は、しっかりと話を聞いてくれる大人がそばにいる。いわゆる耳を傾け、聴き取ろうとして読み取ろうとするという、安心できる友達をはじめ、人の存在というのがやはり大切にされている。2つともそういう学校だなと思った。最後に、白石市の教育長がおっしゃっていたし、北九州市も目標に上がっている「教職員のウェルビーイングを高めないといけません」という言葉があった。私も持ち帰ってウェルビーイングリーダーとして頑張っている。

#### 【B構成員】

2つの学校は、同じ学びの多様化学校でありながら、設置の仕方が違うということがあり、特徴が全く違うというところを驚かされた。

西成田教室は、分教室型ということで、授業時間数が、本校と同じように確保されている。そこが白石きぼう学園との大きな違いだと思った。学びとか学習の遅れを学び直ししていくんだという強い理念をお持ちだなと思った。もちろん体験とかもさせるけれども、やはり勉強はきちんとして、将来につながるという思いを持っておられるように感じた。分教室で行うということ、活用して、定期考査や行事など本校に行くということができたり、本校から先生が来たりというように、学校と分教室との連携や行き来があるというのが西成田教室の特徴だと思った。

白石きぼう学園の方だが、すべてにおいて独自のものを作っておられる。とてもクリエイティブな学校というか、始業時間は9時20分であり、帰りの時間も午後3時前である。一般的な学校の始業時間、終業時間とは、違う時間帯で、そして「学校らしくない学校」というコンセプトでやっていらっしゃる。そして体験活動の機会を、非常に多くしておられる。授業時間数は少ないにもかかわらず、体験活動の機会を多くしている。こういった特徴が西成田教室と全然違うなと思った。

北九州市では教育支援室が4つあって、教育支援室の活動の中身も教育委員会の管轄になってから随分充実してきているし、これからも充実していかれると思う。白石きぼう学園に近い形で、教育支援室というのがあるなと感じた。

### 【C構成員】

まず印象的だったのは、その2校とも環境である。自然豊かな静かな環境にあり、校舎は木がいっぱい使われており、とても子どもたちが癒される空間であると感じた。さらに2校とも送迎バスがあり、不登校の子どもにありがちな人の目が気になったりとか、公共の乗り物が苦手という子どもたちにとっても、登校に対するハードルが下がる手段と思った。また、保護者への負担も軽くなると思う。北九州市で、このような環境を追求しようと思うと、どうしても不便なところにもなるだろうし、自治体が大きいので、バスの運行などは厳しいかもしれないが、親の送迎や、自分自身での登校にもしなるのであれば、時間の柔軟性なども必要かなと感じた。

また、2校ともコンセプトと入学対象がとても明確であると感じた。学ぶ意欲のある子ども、学びの環境を望む子どもが対象であることから、学びが保障される一方で、まだエネルギーが十分に回復しきれていない子どものペースに、どこまで寄り添えるのかが課題でもあるのかなと感じている。また、保護者に対する支援として、富谷の方は、保護者との相談を年4回、定期的に行っていらっしゃる。白石では、面談は定期と随時行っていらっしゃるということで、保護者へのフォローをしっかりといただいていると感じた。白石の方は、授業参観はい

いつでもフリーで来ていただいて構わないということで、これは大変驚いたが、保護者の立場からすると、とてもありがたい仕組みで、気兼ねなく学校に出入りできるということは、たとえ、そんなに出入りしなくても、いつでもできるということが保障されていることで、安心感に繋がると感じた。

先生たちの配置だが、白石でお聞きして私がちょっとびっくりしたのは通常の人事異動で先生がきているということだった。

実は先日、親の会を開いた折に、ご参加の保護者の娘さんが、ステップアップルームに通っていたが、「ステップにこられるんだから教室もいけるだろう」と担任の先生に半ばちょっと強引に教室に連れて行かれて、ステップにも行けなくなったということをおっしゃっていた。不登校に対する認識の個人差がまだまだあるのかなと感じたので、先生方の配置などは、親としては、なるべく理解がある方にいただけたらなと感じた。

2校見せていただいて、学びの多様化学校のあり方を考えることは、イコール今の子どもたちにとって本当に理想的な学びの環境とはどんなものなのだろうということを改めて自分自身にも問い直す機会に繋がると感じた。いわゆる特例校がすべての子どもたちの、不登校の子どもたちに対応することや、解決となることは難しいと思うが、保護者にとっては、その存在はきっと希望の光になると思う。自分の子どもが合うとは限らないが、ぜひ作るならば、妥協しないものを作っていたきたい。

#### 【D構成員】

印象に残ったエピソードをいくつかをお話させていただく。

まず1つ目は、2校共通して、学びの多様化学校に通っている子どもたちは、社会や学校の中で、あまり馴染んでいなかったり、他にあまり居場所がなかったりということから、いろんな経験が乏しい子どもが多いと感じた。

具体的なエピソードとしては、総合的な学習の時間の授業において、「自動販売機で飲み物を買ってきていいよ」と先生が子どもに言ったときに、「買い方がわからない」と子どもが言ったという話があった。子どもたちにいろんな人と、無理のない程度で関わって、知らない場所に行ったり、多様な経験を積み重ねてもらうことが重要であると気づかせていただいた。北九州市が、学びの多様化学校を設置するにあたって、通常の学力を保障するカリキュラムはもちろん、もっと総合的な学習の時間のカリキュラムを充実させていくことが、子どもたちの経験にとっては非常に重要になって、今後の子どもたちの明るい人生に繋がっていくのではないかと。もう1つは、先生たちが子どもとの関わり方について、子どもたちに対する声かけの表現に非常に注意する必要があると感じた。

具体的なエピソードとしては、子どもたちにわからないことを聞かれたとき

に、先生たちが「この部分は何年生のときに習ったよね」と言ってしまうことがあるという話があった。先生たちは決して悪意があって言っているわけではないが、そういったふと出てしまった表現というのが、子どもたちにとっては非常に傷ついたりすることに繋がってしまうと気づかせていただいた。不登校を経験した子どもたちは、精細な子であったり、心が傷つきやすい子どもが思うので、そういう点を踏まえて、先生方が精細な子どもに対する対応の仕方をしっかりとわかっていないと本当に学びたいという子どもたちの思いを無駄にしてしまうことになりかねない。先生の子どもたちへの対し方の研修などを取り入れて、専門家の指導が必要になってくるのかなと思った。私たちがこういうふうに言ったらいいだろう、傷つかないだろうと思っていることであっても、やはり人によって感受性は異なるので、本当にそれが全員の子どもたちも通用するわけではない。思い込みで行動してしまったり、言動してしまったりというのはすごくリスクが大きいと思う。そこはその道に精通している専門家のご指導のもと、勉強を教える際に避けた方がよい表現だったりとか、逆にモチベーションを上げるために効果的な表現というのを、専門的に学んでいくことによって、子どもたちの学びであったりとか、より活動的というか、本当に子どもたちがその学校に、足が向くようなことに繋がっていくのではないかなと思った。

#### 【E構成員】

白石きぼう学園の先生方の生徒との関わり方については、スクールカウンセラーが専属でいらっちゃって、随時、アドバイスをしているという状況にあるのか。

#### 【事務局】

白石きぼう学園は、スクールカウンセラーは常駐ではないと伺っているが、毎朝9時から9時20分の生徒さんが登校してくるまでの間に必ず職員会議を行っている。前日の子どもたちの状況などを引き継ぐようにしておられて、その際にこういうふうに声かけてみようというようなことを職員全員で共有しているとおっしゃっていた。

#### 【C構成員】

白石の校長先生から伺って印象に残っていることが、子どもたちの話を最後まで聞く、否定せずに聞くなどを教員間でも徹底しているとおっしゃっていた。何より、大人同士が安心して対話できるような話せる場づくりを心がけているということをおっしゃっていたのが印象的であった。やはり先生たちも、遠慮せずに話せる場がないと、子どもたちのことを受け入れるというのも難しいとい

うか、それがあってこそその先生の立場なのかなと感じた。

#### 【F構成員】

今のご報告の2校が、宮城県ということだが、例えば東北の大震災で、かなり子どもたちがメンタル面でもダメージを受けた。それからもう10年以上経過したが、ベースとして、宮城県の中で県の姿勢として、そういう子どもに対する取組みというものを、全国レベルよりは意識が高いというか、あるいはより積極的に取り組んでいるということを感じられたか。

#### 【事務局】

宮城県の教育委員会の方から学びの多様化学校や不登校対策全般のお話を聞く機会は残念ながら今回なかったが、それぞれ設置された2つの市に関しては、最近不登校が急激に増えているという表現をしておられた。両校とも検討を始めてから2年で作っているが、その前から増えていたということであった。震災からもう10数年経つので、今の中学生はぎりぎり経験者かもしれないが、小学生は震災を知らない世代になっている。その中で、東北の町だから不登校が増えているという言い方はされておられなかったが、我が町での危機感を持っているという言い方をしていた。我々にも通じるような最近の傾向を反映した学校なのかなと受け取っている。

#### ○議題（2）今通えている居場所の居心地向上策

#### 【事務局】

資料3 「第3回 不登校児童生徒のための教育機会確保に係る検討会議」  
議事（1）～（3）説明資料 に基づき説明

#### 【B構成員】

居心地向上策で、環境改善は非常に重要なことである。暑い夏でも、学校に行って教室に入れなくても、ステップアップルームという涼しい部屋に行けるとなるし、教育支援室においても、環境改善することは非常にいいことである。そこは大事なことではあるが、さらに大事なことは、先ほどC構成員がおっしゃったような、先生の声かけとか、その場でどのように関わってもらえるとか、それこそがさらに重要な居心地感に繋がるのではないかと思う。先日のアンケートを、学校にフィードバックされたというのは非常に大切なことだが、お忙しい学校の中で、どれぐらい実際にアンケートを使った研修をしていただいているのか、厳しい言い方だが、本当に不登校の子どもは学校に来ている子どもの中

で言えば、少数派である。多くの子どもたちを指導して動かしていくこと、それから生徒指導上の問題など様々なことに対応していくのに、どうしても動きのある方に、エネルギーが注がれ、やっとの思いで来ている子どもに、なかなかエネルギーを注ぐことが現実的に難しいということも、十分わかってはいるつもりだが、でもそれを、やはりそこをみんなでそのハードルを超えていかないと、本当の意味で、居心地向上策にはならないのではないかなと感じている。お尋ねだが、この研修資料として活用されて、どういった反応があったかというような事例が、実際の声が上がってきていたら教えてほしい。

#### 【事務局】

1月の校長会長会議でお願いをした段階であり、まだ実際に使われた後の感想までは聞いていない。

#### 【G構成員】

本校では、この資料を使っての研修はできていないが、資料の内容について、職員への声かけは行っている。例えば、終礼のときに、子どもたちへの関わり方について、資料の中から本校の実態に合った内容を1、2点拾い上げ、「大声で叱らないようにしましょう」など、不登校の子どもたちだけではなく、すべての子どもたちに対してそのように関わっていこうということで職員に伝えている。今週は大きな声で叱らないとか気になる子どもたちには必ず声をかけるとか子どもと関わる上での重点項目としても活用している。今後、資料も活用していきたいと考えている。

#### 【H構成員】

本校も全体に言ってもなかなか徹底できない。心配なお子さんに関する相談が来たとき、なぜそういうふうなきっかけになったのかを聞くと、やはり担任の先生の声かけだったり、授業中の声かけだったりということがきっかけでなかなか学校に来られなくなったというようなこともあった。先生方の関わり方というのが大切ではないかというお話があったが、まさにそうだなと感じている。

「大きな声で怒らない」など、このアンケートが何かしら先生方に還元できないのかというようなお声をいただいたので、それはとても意識して指導をしている。全体でいう場面はなかなかなかったが、個別に対応している。また、ステップアップルーム、あるいは関係機関との関わりを密にしていくとなると、先生方が、なかなか学校に足を運べない生徒、別室で勉強する生徒に対する意識改革というか、「細かな配慮が必要な生徒がいる」ということ、なかなか学校に足を運べない生徒を抱える家庭との関わり方にいろんな関係機関が関わっていただ

くことによってスムーズにいくということを、今まで積極的に関わってなかった先生方が、どんどんいろんな知識を身に付け、いろんな事例に出会うたびに理解が、一人一人、何かあればあるほどに身につけているなど感じている。

#### 【高橋教育次長】

私も学校側にいた職員として、今この立場にいるが、やはりこの問題は、既存の学校のシステムの大きな課題を踏まえている部分がある。ところが、やはり個別の事例を取り上げられると、先生を責めることにばかり終始してしまう。そこから脱却しないと、この問題は解決しないのではないか。先生方も保護者の方や本人と同じように悩んでいる。その状況を踏まえて、新しい仕組みなどを一緒に作り上げていくという、そういう機運が、これからの次のステップはそういう感じになっていくのではないか。

#### 【A構成員】

事務局から折尾中学校の学年担任制のご紹介があったが、この場でも前回お話ししたように、うちの学校は来年チーム担任制を置くことになっている。なかなか先生方の意識を変えることがこれだけ難しいのかなと感じている。会議の中では、いろんなできないことばかり挙げている。だから、私は「できることを探してください、どうすればできるでしょうか」という会議の展開の仕方をしている。折尾中で1年間、大成功をおさめているということで、ぜひ学校訪問させていただきたい。生徒から見て、いろんな価値感のある先生方がいるという視点を持っていただくことは重要である。先生方に言わせると、仕事の改革にはならないとか、いろいろ視点が教師側になってしまう。そこを何とか改善していきたいなど今模索しているところである。

#### 【F構成員】

今の説明で、ステップアップルームの全中学校への設置完了ということだが、ここには専属の先生はおられないということか。

#### 【事務局】

ステップアップルームは、北九州市の場合は中学校に配置が完了しているが、中学校の場合、空きコマの先生が面倒を見たりとか、それから支援加配という加配の先生が入ることはあるが、必ずこの先生がステップアップルームの先生ですという方がすべての学校にいらっしゃるわけではない。



### 【事務局】

中学校で10数校だが、ステップアップルームに学校支援講師という不登校担当の職員を配置している。その先生がいる学校については、ステップアップルームを対応していただいているという状況である。

### 【F構成員】

とてもそれはいいことだと思う。担当される先生も落ち着いて、そのステップアップルームに来ている子どもたちと人間関係がつかれる。子どもたちもすぐ安定すると思う。私は今回この構成員ということで、市民という立場で来ている。教育大綱の中に「地域との繋がり」という文章が出ている。福岡市の場合は、このステップアップルームに、専属の先生がついている。これはこれでいいことだと思うが、ここに先生が常時張り付いておくというのは、いろいろ経費的な面とかがある。実はここに、地域の方が、ボランティアという形で、ステップアップルームのいわゆるアシスタントということで、子どもたちとの関係を作り、また、学校の先生とも関係をつくる。要は、子どもたちと先生たちとの間の直接的なものではなくて、子どもたちの気持ちを受けとめながら、先生にそれを噛み砕いて伝える。年配の人になるかもしれないが。そういう役割が、市民という立場の方々を学校の中で有効に活用していただくことで、先生も楽になるし、子どももいつもそこに行くと、地域の方がいるということで、安心感にも繋がっていくと思う。

北九州市でのステップアップルームの活性化とか、あるいは活用をしていくときに、その地域との繋がりの中で、地域のボランティアを活用していくということも、これからの検討事項の中に入れていただきたい。

### 【事務局】

ステップアップルームの取組もいろいろあり、地域に出て、市民センターの中でやっているというステップアップルームもある。第2回の会議で、「ぼってりー」という小倉南区の企救中学校校区の取組について紹介させていただいた。こちらは学校の支援講師が市民センターに行って、そこに通ってくるお子さんたち、小学生から中学生までいるが、その子たちといろいろ話をしながら、地域の大学生にも手伝っていただいて、大学生はスクールヘルパーという制度を使って、手伝っていただいて、地域の大人の方にも見守っていただいている状態で、協力してくださっている。残念なことに全市いろんなところでこの取組ができるかということ、なかなかその地域の事情もあるので、こういうやり方だったらできるんじゃないかということで取り組み事例として、他の施設に対しても紹介するような話を、次の「新たな選択肢」のところでお話をしようと思っている。

○議題（3）新たな選択肢をふやす取り組みについて

【事務局】

資料3 「第3回 不登校児童生徒のための教育機会確保に係る検討会議」  
議事（1）～（3）説明資料 に基づき説明

放課後等デイサービスにおける不登校支援の取り組みについて、NPO 法人夢つむぎ 高田遥佳 副理事長よりご説明いただいた。

【NPO 法人夢つむぎ 高田遥佳 副理事長】

私が不登校に関して本格的に関わってきたのは令和5年6月からで、5名の在籍がいる中で1人、1年半の不登校を経験して今、学校に週2から3回通うようになった。最初に介入したときに、口にするのが、だるい、ゲームがしたいということがあって、ただ本当の理由は、勉強がわからないとか提出物への取り組み方がわからない。家族全体、私たちもともと障害が事前にあるということが前提で支給が出ている放課後デイなので、家族の誰かがその障害を抱えている。あるいは生活が困窮しているので制服や学用品を用意してもらえない。あとは昼夜逆転による栄養不良というのは、この半年でこういう背景があるんじゃないかというところにたどり着いた。

本人たちに聞くと、授業のスピードについていけない、提出物を出せないことで注目される恥ずかしさ。周りの生徒と同様にできない恥ずかしさ。自分なりに頑張っているけど指導される辛さ。課題の管理と整理ができない。そしていじめ。あるいは兄弟姉妹の誰かが学校に行っていなければ、自分も行かなくていいかなと思ってしまうという背景があった。

放課後デイだったらなぜ来れるのという話を聞くと、自分のペースでゆっくり勉強ができる。わからないところが聞きやすい。そして、聞いても恥ずかしくない。見たり体験しながらの勉強だと理解がしやすい。同じようなタイプの人がいるので居心地がいい。課題の管理と整理や進め方を一緒に考えてくれるのでわかりやすく自分で取り組める。学校に行けていないことを否定されず、周りが受け入れて一緒に頑張ってくれる。というところで、放課後デイでは一人一人のペースに寄り添い一緒に取り組むことができ、なおかつ同世代や同じ境遇の児童が集まっているので気持ちを共有することができ、学校以外の居場所になっているのではないかと思っている。

学習の風景だが、この一番奥の子どもが1年半の不登校状態で、今は週に2回から3回学校に通っている。私たちスタッフは全員で7名いるが、不登校傾向に

ある子が5名いる。もちろん特別支援学校の子もいる。様々な資格を持っているスタッフ、福祉的な資格、あるいは教職免許の方もいるし、私たち7名とも、もともとの職業は福祉ではない。いろんな職業の経験を経て、この業種に携わり資格を取っていった今こういった資格を持ったスタッフが関わっているという背景となっている。このうち7名のうち3名は障害者雇用だが、その3人が、みんな不登校を経験している。その時に辛かった経験とか、こうしてもらえば、もしかしたらできたかもっていうのを極力拾い上げて、意見を合わせながら、私たちも今後の方針や目標設定をしている状況である。

利用開始前は、学校、家庭訪問を基本的に行う。そして所属している学校に連絡をして放課後デイがこれから介入しますということを一報を入れさせていただく。

不登校あるいはもともと発達障害をお持ちの方がいるので、アセスメントは非常に大事だと思っている。利用にあたって今「ぴこっと」というICTのアセスメントツールを使っている。これは業務の簡素化だけではなく、保護者が取り組んで欲しい支援がリスト化されているので、現状に即した支援ができる。そして子どもの特性を把握し、苦手なことなど客観的把握ができ、頑張るところなど方法の助言が的確になる。スタッフ間で常時24時間動いているので、セキュリティはもちろんかかっているが、今までその共有ができる。こういったデータベース化されることで振り返りや動機づけでスタッフの助言をもとに本人たちのチャレンジ意欲が湧いているという現状がわかっている。また、こういった失敗をしても背景とかにも目を背けず自分でどうしたらいいのか、そして今後どう取り組んでいくのかということが、スタッフと話し合うことで自分からやってみたいということで、一緒に取り組むということが実現している。これが将来の中学校卒業後の進路選択に結びついている。

あと、個別支援計画をもとに、訓練を立案するが、まずは生活リズムを整えることからスタートし、何時に送迎に行くねと連絡するが、起きていないという現状が多いので、まずテレビ電話等を活用して、本人を起こしたりもした。

あとは、調理実習をさせているが、あるものを活用して、どう工夫してやるかということチームでやるという勉強をしようということで今回こういった調理実習もした。そして、公共機関の利用と買い物の練習で、もちろんお金を会社の経費だよということで渡して、それを7人で均等割りして、じゃあどのように使うのか、使ったものは領収書をとって報告書をあげるみたいな訓練をふやすことにしたが、これもやはりみんなで話し合わないといけない。これは、最終的には高校の進学希望者が多いので、高校選びの際に3年間通学することを念頭に置いている。公共機関の乗り継ぎでどれぐらいかかるのか、時間はどれぐらいか、ルートは自分たちで下調べをして実際に計画通りにできるかという

練習である。あとは、とにかく基本的には放課後デイなので、もともと学校に行っている子が前提だが、その中に不登校の子が入り、一緒になって、こういった活動をするということは、基本的に全部参加はできているので、外に出る体験活動とかも積極的に取り入れている。あとは学習の課題への取り組みだが、基本的には学校が準備しているワークを中心にやる。もちろんわからないところとかもあるので、最初は書く体力がそもそもないので、まずその答えを見ながらでもいいから写す練習から始めていく。ただ不登校の子たちも出さないといけないものということはわかっているので、ゆっくりでも1ページ1ページずつは進める。学習の理解をするために、教育委員会のホームページに載っている「まなQチャンネル」のプリント等を活用して、あるいは教科書、問題集を活用しながら、学習の定着を目指している。

全く行っていない子でも、テスト20点取るとすごく私たちもうれしくて、本人たちも、次は30点取ろうとかになってくるので、放課後デイの通所頻度は格段に上がっている。進路に関しても、放課後デイを卒業した先輩たちが高校資料パンフレットを置いていってくれるので、そういうのを常時自由に見られるようにしている。

家庭に関しては、テレビ電話も電話も24時間というのはなかなか難しいので、LINE等で状況等いつでも、どんな夜でもいいからLINEしておいでということで、お母さんたちがどんどん積極的に相談をしてきてくれている。最初の聞き取りのときにどういった機関が関わっているか、病院、児童相談所等との連携をとって報告もしている。特に発達障害の方なので、療育センターに関わっている子に関しては受診に同行して、現状環境に関しての主治医からアドバイスをいただきながらそれを取り入れている。

学校との連携だが、基本的に、学校に私たちから、今後どういうふうに関わっていきましようかという話を協議していく。これは私たちの取組だが、登校に向けた支援計画書というのを作成する。何をするか、そして、どういった支援でいくのか、そして評価、こういった活動ができましたと。あるいは、学校にやりっぱなしではいけないので、支援記録という形で、学校に毎週金曜日、例えば報告書を書かせてくださいみたいな感じで、事業所と学校と話し合うので、どんな内容をしたのかということと、週に1回必ず保護者と、あるいは放課後デイスタッフどちらかが1名行くようにしているので、もちろん本人が行ける場合は本人も行っている。その中で活動内容を確認しつつ、担任の先生と面談して、また来週頑張ろうみたいな感じで帰っている。子どもと家庭の橋渡しとして放課後デイはすごく、むしろ使ってもらいたいなどは思うが、保護者は、やはり学校にこんなことしたら、こんな相談したら迷惑じゃないだろうかとか、中学校の内申に響いたら困るという。家であっている状況が外に発信できないという状況を

私も何回も経験してきたので、そういった状況を逆に噛み砕いて学校に伝えることができるというのは放課後デイとしては、すごく役割を果たせるのかなと思っている。そして、保護者と学校と放課後デイが間に入って意見を交換したり、方向性をすり合わせていくことで、保護者も安心して放課後デイに出せる。学校も最初はぎこちない連携のやりとりだったが、気軽に、「今日は高田さん来てますか」みたいな感じで、学校も気軽に連絡してくるので日々のやりとりが気軽に報告し合えるということで本人が安心して学校に行けるということに気がついて、本当に昼夜逆転で24時間寝ない人だったが、なるべく9時に起きようとか、本人も生活のリズムを作っているような状況である。最後に放課後デイが関わることで、きめ細かい支援ができるのではないかとこのところ、子どもあるいは家族の困り事を発見してきちんと細かく対応できるんじゃないかというのが、放課後デイの役割として果たすべきところではないかと思っている。

#### 【F 構成員】

進路指導のところ、高校に行きたいという希望の子どもが多いと思うが。学校はいい、働きたい、就労したいと。そういう子どもに対する進路指導はどのように行っているのか。

#### 【NPO 法人夢つむぎ 高田遥佳 副理事長】

今年1人いらっしゃるが、もともと放課後デイサービスが障害があることが前提の福祉サービスなので、本人とまず一般で働けるかどうかを面談はする。やはり厳しそうとなったときに、大人の福祉サービスの就労系サービスの移行支援だったり、B型からスタートするとかそういった手続きも基本的に相談支援専門員とよく話して、手順は考えてやっている。

#### 【C 構成員】

民間のフリースクールと、放課後等デイサービスはどのように明確に違いというものがあるか。

#### 【NPO 法人夢つむぎ 高田遥佳 副理事長】

私は学校関係者ではないのでフリースクールと関わったことはないが、放課後デイというのはそもそも、障害者支援課から指定がなされるので活動の内容に関しては、あまり縛りはない。私たちも障害福祉の方に10年以上いるが、事業所によって全然確かに違う。それが要は世間でいう劣悪な環境とか、あるいはここは手厚いだったり、質と言ったところにもものすごく差が出るのは、やはり民間の放課後デイである。もちろん北九州市から出ている基準に則って指定は出

てはいるけれども、内容に関してはそういった明確な基準がないので、そこは本当に私たちも保護者から当たり外れがあるというふうに言われているので、最初は少人数ですごく手厚かったけれど、定員がいっぱいになると手薄になったとか、そういった質の低下とかも話は聞く。フリースクールはわからないが、それが放課後デイではないかと思っている。

#### 【C構成員】

親の会をやっていて、放課後デイに行っているというお子さんがいらっしゃるが、ただ行っているだけみたいなお話を聞いたりすることもあるので、今日お話を聞くと全然違うなと思った。

#### 【E構成員】

放課後デイサービスは基本的に障害の診断を受けて、通所する支援機関であると思うが、不登校のお子さん方で、診断がつかないような方々も通っている場合があるのか。

#### 【NPO 法人夢つむぎ 高田遥佳 副理事長】

今それはない。その子たちがやはり問題になってくるが、あくまでも発達障害があるとか、あるいは知的障害など障害があることを前提に、あるいは支援学級に在籍しているということで放課後デイは利用できる。そういった障害ありきで受給者証が出る子でないと通えないのは事実である。

#### 【小嶋座長】

北九州市に学びの多様化学校を設置するといった場合、どのような学校を望むのか、どのような学校であるべきかなど、ご意見をいただきたい。

#### 【F構成員】

学びの多様化学校という形で特例校という位置付けである。取り組む場合は、方向性としては子どもの選択肢の1つとして、大事な要素だと思う。ただこの特例校という呼び方に関しては、特例校というよりも、今の不登校の子どもたちが、私たち大人に向けて、発信している声があると思う。もっと学校を楽しくして欲しいとか、学ぶのを面白くして欲しいとか、そういう声を受けとめて、そういう声を反映しているような学校にしていく。

おそらくその多様化の方向に子どもたちは向かっていると思う。私はデンマークの学校によく行っているが、実はデンマークの公立学校も一時期、子どもの数がどんどん減った。公立の学校からプライベートの私立の学校にどんどん移

った。公立の学校教育が硬直化して、子どもたちのニーズにこたえきれなくなった。そのときどうしたかという、公立学校の先生がプライベートの学校に視察に行って、こんなことやっているのかということで、それを公立の方に取り入れて、子どもたちが戻ってきた。今の公立の学校がある。

先ほど言ったフリースクールだとか、いろんな取り組みがあるが、それを特例という形ではなくて、できればその特例校でやっていることが、一般の学校に普遍化していく。ユニバーサルデザインというか、そこの宣伝になるような学校としての特例校。だから、特に子どもたちのためにというよりは、こういう学校だったら、すべての子どもにとって面白くて楽しい場所になるんじゃないかという位置付けでイメージしていられると、私はこの特例校の位置付けは、日本の教育を変えるような、大きな意味を持っていると思っている。すごく期待をしている。そういう意味では、これからの取り組み、具体的な展開で、どう詰めていって、子どもたちにとって喜ばれる存在になればいいかなと思っている。

#### 【C構成員】

新しく学びの多様化学校を北九州市で作っていくという前提で、今話しているのか。

#### 【事務局】

作ることはまだ決まってないが、作るための準備ということで前向きに検討したい。

#### 【C構成員】

白石でお話を伺ったときに、入学の対象となるのは、まず今学校に行けない、または今の学校システムそのものに馴染まないお子さんたちという言葉が聞いたときに、やはり今のその学校の既定路線には馴染まないというお子さんも少なからずいるように感じている。親の会を開く中でも、そのような印象がある。その上で、学びの多様化学校でどのような教育を提供していくかというところだが、子ども自身が好きなことを見つけて、好きなことから学びを広げていけるような学校であったりとか、自分で考えて行動していけるような子どもになるような学校。例えば、平尾台にきのくに子どもの村学園の北九州子どもの村小学校、中学校がある。去年、私どもおやすみ処 ami で、このきのくに子どもの村学園を取り上げたドキュメンタリー映画の上映会を一昨年に行った。そこで見た子どもの村は、私立ではあるが、1つのテーマをクラスで、学期で決めて、そのテーマから学びを広げるという教育の方針を行っている。例えば、「豆」というテーマで、今学期は行きましようと思ったら、豆がいつどこからやってきたの

か、歴史とかも学ぶ。例えば「校庭に池を作る」というテーマがあったら、体積容積、セメントを作るならば比が必要であるとか、そういったテーマから学びを広げていくやり方で、教育をされておられる。もちろん机上の紙の勉強もされるが、子どもの村の教育というのは、型破りすぎるかもしれないが、子どもの自己信頼感というか自己有用感というか、自分にもこれができるんだというような、そういった力を取り組んでいけるのではないかなと思っている。そういう教育が北九州で、学びの多様化学校としてやっていただけたら嬉しいと思っている。

#### 【I 構成員】

保護者相談はどれぐらい力を入れるのか。

#### 【事務局】

保護者相談についても、こちらの学校の大事な機能の1つと考えており、当然、個人情報保護を保護する観点もあるが、保護者会なども、できれば組みたいなどと思っているのが1つと、白石では、随時、保護者の方に見に来ていいですよという仕組みを作っておられた。見に来てついでに、そのまま保護者相談をしていただくという話も聞いているので、そのような取り組みで、できるだけ接点をふやして、お話を聞くような機会が設けられればいいなと今考えている。

#### 【I 構成員】

保護者相談は、北九州でそんなに行われておらず、学校の在籍がある場合は、不登校等支援センター等で、保護者面談を受けることができると思うが、それ以外の枠がない場合は、保護者相談はそんなに受けられる場所がない。保護者相談をやっているという観点で、YELLの方に、例えば中学生とか小学生の親御さんが来られることがある。ちゃんと話をできる場がそんなにないんだなっていうのも思っている。保護者が困ったときとか不安になったときも、その受け皿として、この学びの多様化学校で対応してくださるとよい。生徒何人に対して教員を何人つけなければいけないというようなものはあるのか。

#### 【事務局】

この学びの多様化学校は、通常の学校の教員の配分定数と同じルールである。特別支援学校のように、8人に1人といった定数があるわけではない。通常の1クラス増えたら、先生を1人つけますとかいう、そういう計算になるので、制度上、すごく手厚くできるというものでは、残念ながらない。あとは、どういった加配が設けられるのかとか、どういった工夫で、サポートができるのかということをお我々は知恵を絞らなければいけないと考えている。



### 【I 構成員】

たくさんの生徒を見るためにたくさんの先生がつかないといけないとなると、定員が少なくなってしまうのではないかと思うので、たくさん今不登校がいるという現状の中で、定員をどんなふうにとっていくのが大事なんだろうと思いつつ、このくらいの生徒に対しては、このくらいの先生がつかないといけない、そうすると定員が絞られるから、困るなど。そこを少し心配した。

### 【事務局】

定員については、我々も悩ましいと思っている。福岡市が、今設計している規模が40人から60人程度と、1学年20人なのかなと、今お聞きしている。それであってもおそらく3学年で3クラスできますよという程度しかない。1学年1クラスで、それに応じた教員配分になるので、それほど手厚く教員が配置されるわけではないだろうと思っている。もう1つあるのは、例えば建物が限られた場合、ハード的に、少人数学級を作るとしても、この部屋数しかつくれませんということで、建物的に制約が出てしまうこともある。ハードと教員の配置と、両方の面からの定員を設けるか設けないかというところは非常に悩ましい問題である。

最近の流れだが、転入学については、入ってきたい、この学校で学びたいという声には割と柔軟に対応する学校が多いように感じている。中には、もう割としっかり定員を運用して、1学年13人に決めていますみたいなどころもあるが、例えば、お試しで、しばらく来ていいですよということでそこでの学びを体験してもらって、合うようだったらどうぞ続けてください。それに応じて、しかるべきタイミングで教員が追加で配置をされたりというケースもあると聞いているが、そんなに柔軟に配置できるわけではないので、そこは、非常に悩ましいと考えている。

### 【小嶋座長】

検討会議の中でいただいたご意見を踏まえて、教育委員会には引き続き不登校対策の取り組みを進めていただきたい。特に先ほど議論があった学びの多様な学校については、ぜひ北九州市での設置に向けて前向きに検討を進めていただきたい。

### 【田島教育長】

教育委員会を代表いたしまして、一言お礼のご挨拶を申し上げます。皆様におかれては、今年の夏からの回数としては、少ない3回だけだったかもしれないが、

1回1回が非常に貴重なご意見をいただき、本日最後に、来年度に向かって、私の中でのイメージを固めたいなと思ってご議論いただきながら、あまりにもいただいた課題が大き過ぎて、全く頭の中が整理できない中で今この挨拶に立ち上がっているが、少なくとも、不登校児童生徒の教育機会を確保するという喫緊の課題には、今まで議論をいただき、ご意見を何らかの形で、来年度に向かって作り上げていきたいと考えている。検討会議というのは本日をもって、一旦その役目を終えることになるが、今後、私どもの方で方針を策定し、具体的な事業に落としていって、それについては、先ほど村上構成員のご質問あったように、やはり制度というか、例えば規模だとか、定員だとか、もっと言うとハードであれば、場所をどうするとか、さらに言うと、先ほど厳しいご指摘があった、そもそも日本の教育システムが制度疲労を起こしているのではないかというのは、私ども教育委員会というか、学校現場の先生方そのものが、体感的に感じているところもある。それを今回の特例校という言い方を使わなく、学校というよりは、多様化という、そこのシステムにどう落とし込むかというのは非常に重い課題だと考えている。教育というには、とにかく社会の鏡だと思う。子どもたちが今の状況というのは、不登校というよりは、日本の社会そのものが今もう本当に揺らいでしまっている。その鏡としての今の子どもたちの状況だと思う。そういう意味では、まずは子どもたちがとにかく、先ほどC構成員が最後におっしゃった、楽しいとか、安心して、好きだとかいう気持ちに素直に現れるような場所になって欲しいなということで、前向きにいろいろと検討して参りたい。今後とも、ぜひ様々な面から皆様方のご助言をいただきたい。

○事務局より、第3回会議の議事録、第1回から第3回会議での主な意見についてまとめたものについて確認を依頼する件と、追加意見があった場合の提出期限の件について説明があり、会議は閉会した。